

自閉症児の援助要請行動の育成に向けた支援方法

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-06-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 織部, 恵理子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00009566

自閉症児の援助要請行動の育成に向けた支援方法

織部恵理子

Support Method for the Cultivation of Help-Seeking Behaviors for
Children with Autistic Spectrum Disorder

Eriko ORIBE

1 問題の所在と目的

障害者権利条約では、障害者の権利を擁護することの重要性が示され、合理的配慮の否定は差別であることが明示されている。障害者自身が合理的配慮の申請をしながら、自己の権利を擁護していく自己権利擁護力の形成は、学校教育に求められる指導・支援の目標の一つであり、援助要請行動の育成はこれにつながるものである。また、義務教育段階の全児童生徒数は減少傾向であるのに対し、特別支援教育の対象児童生徒は増加傾向にあり、特別支援学校よりも通常学校において多くの子どもたちが学んでいる。高等学校においても特別支援教育の充実、自閉症の生徒たちへの対応の必要性が叫ばれ、卒業後の社会生活に向けた課題として、自己理解教育や配慮申請の権利教育が挙げられている。高等学校での教育につなげていくため、小中学校においても自己に必要な援助を自ら求めていく力を育成する必要がある。自閉症児が多様な人々が生活するインクルーシブな学校、共生社会において、自分が貢献できる可能性のある場に出会い、他者に必要な支援を求めていく援助要請行動を育成していくことは重要な課題であると考えられる。

援助要請行動に関する研究では、思春期や青年期を対象にしたものや子育てや教育に関わる専門家、保護者を対象にした研究が多く行われており、援助要請行動を促進、抑制する要因に視点を当てたものや援助要請のプロセスに注目した研究がなされている。しかし、自閉症児を対象にした研究はまだ少なく、援助要請行動における自閉症児の特徴を探ることは、大きな意味があると考えた。そこで本研究では、援助要請行動には、どのような要因が関連しているのか、自閉症児が抱える困難さはどんなところにあるのか、またそういった行動を育成するために有効な支援方法について探ることを目的とする。

2 研究の方法

C中学校の特別支援学級に在籍する、2名の自閉症児を研究対象とする。実態の把握と援助要請行動を高めるために生徒への効果的な支援の要因を明らかにすることを目的とした、質問紙調査を実施する。質問紙調査により明らかになった要因、生徒に関する資料や観察から得られた情報を勘案して自立活動の授業実践と対話的アプローチを行っていく。事例生徒の行動観察や2回目の質問紙調査、また支援者を対象にしたインタビュー調査を基に、事例生徒の変容を検討し、支援の有効性を検証する。

3 援助要請行動における自閉症児の特性

(1) 援助要請行動に関する質問紙調査の実施

自己の認識や他者受容、対人タイプ、援助要請スキルなど、援助要請行動を行う際に必要な要素と仮定した内容について、自己肯定意識尺度(平石,1990)や基本的信頼感尺度(谷,1996)などから項目を抽出し、複数の特別支援学校教員や大学実習生による検討を通して30個の項目に整理して質問紙を作成し、質問紙調査を実施した。調査対象はC、D中学校の自閉症・情緒障害特

別支援学級に在籍する1年生から3年生26名、E、F特別支援学校に在籍し、自閉症の診断を受けている一般就労希望者の高等部1年生から3年生21名、C中学校の通常学級に在籍する1年生180名、合計227名である。調査時期は、201X年5月に行った。

(2) 実施結果と考察

質問紙調査の回答結果に対し、因子分析(主因子法)を施し、固有値の減衰状況をもとに7つの解釈可能な因子を抽出し、プロマックス回転を行った。いずれの因子に対しても負荷量が0.35未満である項目を除外し、項目選定を行った結果、26の項目を採用した(表1)。各因子は、「自己表現」「他者信頼感」「弱み自己理解」「強み自己理解」「対人積極性」「依頼方法」「自己肯定感」と命名された。

次に7つの下位尺度について、健常児群、自閉症児群における各下位尺度間の相関係数を算出したのが、表2、表3である。健常児群は、ほぼ全ての下位尺度間において中程度の相関が見られた。「自己表現」と「弱みの自己理解」には弱い相関が見られ、「弱みの自己理解」と「自己肯定感」にはほとんど相関が見られなかった。一方、自閉症児群は、「強みの自己理解」と「自己表現」、「強みの自己理解」と「他者信頼感」に中程度の相関が見られ、「自己表現」と「他者信頼感」、「自己表現」と「対人積極性」、「他者信頼感」と「対人積極性」、「強みの自己理解」と「自己肯定感」の間に弱い相関が見られたが、その他の下位尺度間には、ほとんど相関が見られなかった。「依頼方法」を学習する以前に、「強みの自己理解」、「他者信頼感」、「自己表現」を育てる学習を意識的に取り入れて、援助要請行動につなげていく必要があると考える。

表1 援助要請行動に関連する因子構造

	因子						
	自己表現	他者信頼感	弱み自己理解	強み自己理解	対人積極性	依頼方法	自己肯定感
あなたは人にはっきりものを言うことができますか	0.787	-0.106	0.011	-0.03	-0.03	-0.156	0.056
あなたは人と話することが苦手ですか	-0.702	0	0.009	0.021	-0.212	0.089	0.037
あなたは分からないことがあるときは人に聞きますか	0.695	-0.044	0.223	-0.084	0.062	0.051	-0.084
あなたは初めてあった人に自己紹介ができますか	0.621	0.041	-0.017	0.14	-0.311	0.042	-0.07
あなたは人にやってもらいたいことをうまく伝えることができますか	0.608	0.057	0.053	-0.072	0.173	0.065	0.052
あなたはあまり知らない人に話しかけるときに緊張しますか	-0.562	0.167	0.187	-0.118	0.06	0.084	-0.042
あなたは自分が困っているとき、だれかに「手伝ってほしい」と頼みますか	0.557	-0.037	0.104	-0.06	0.179	0.134	0.014
あなたは新しく出会った人に対して自分から積極的に親しくなりますか	0.554	0.236	0.029	0.068	-0.06	-0.152	-0.051
あなたは自分の感情や気持ちを素直に表現することができますか	0.421	0.207	-0.133	0.127	-0.172	0.174	-0.114
あなたは不安なときに話を聞いてもらうと安心できる相手がいいますか	-0.022	0.927	0.002	-0.103	-0.095	-0.016	0.033
あなたは困っているとき相談できる人がいますか	-0.072	0.867	-0.046	-0.022	0.011	-0.038	-0.065
あなたは自分のことを分かってくれる人がいると思いますか	0.139	0.687	-0.075	-0.064	0.125	-0.044	0.087
あなたは自分のことを褒めてくれる人がいると思いますか	-0.11	0.568	0.039	0.156	0.067	-0.013	0.119
あなたは自分の苦手なことを知っていますか	-0.054	-0.046	0.714	0.064	-0.158	0	0.112
あなたは自分の悪いところを知っていますか	0.045	-0.023	0.684	0.128	-0.068	-0.016	-0.154
あなたは自分の良いところを知っていますか	0.065	0.026	0.112	0.762	-0.149	-0.012	0.017
あなたは自分の得意なことを知っていますか	0.066	-0.076	0.226	0.495	-0.11	-0.05	0.249
あなたは自分に合ったリラックス方法を知っていますか	0.034	-0.083	-0.014	0.452	0.275	0.116	-0.086
あなたは人に推すことほつとりたいと思いますか	0.007	0.009	0.171	0.071	-0.524	-0.109	-0.069
あなたは周りの人たちによって変えられていると思いますか	-0.18	0.271	0.169	0.313	0.418	-0.014	-0.142
あなたはできることなら人とかかわりたくないと意思しますか	-0.396	0.003	-0.084	0.112	-0.398	0.02	-0.059
あなたは人に何かをたのむときに、してもらいたいことを決めてからたのんでいますか	-0.111	-0.072	-0.004	-0.026	0.215	0.701	0.087
あなたは人に何かをたのむときに、相手の都合を考えたからたのんでいますか	-0.133	-0.076	-0.064	0.101	0.121	0.571	0.017
あなたは自分でどうしてもできないことだけに質問しますか	0.044	0.103	0.226	-0.081	-0.406	0.445	0.004
あなたは自分ばかりをわれていると思いますか	0.024	-0.026	-0.001	0.01	-0.108	-0.064	-0.724
あなたは自分のことが好きですか	0.28	0.141	-0.204	0.143	-0.023	0.034	0.433

表2 健常児群 各下位尺度間の相関係数 (n=171~175)

	自己表現	他者信頼感	弱み自己理解	強み自己理解	対人積極性	依頼方法	自己肯定感
自己表現	1	.440**	.194*	.431**	.257**	.347**	.429**
他者信頼感	.440**	1	.393**	.467**	.453**	.358**	.428**
弱み自己理解	.194*	.393**	1	.421**	.314**	.246**	.089
強み自己理解	.431**	.467**	.421**	1	.308**	.332**	.434**
対人積極性	.257**	.453**	.314**	.308**	1	.198**	.254**
依頼方法	.347**	.358**	.246**	.332**	.198**	1	.297**
自己肯定感	.429**	.428**	.089	.434**	.254**	.297**	1

表3 自閉症児群 各下位尺度間の相関係数 (n=46~47)

	自己表現	他者信頼感	弱み自己理解	強み自己理解	対人積極性	依頼方法	自己肯定感
自己表現	1	.315*	.17	.598**	.294*	.178	.261
他者信頼感	.315*	1	.01	.395**	.299*	.01	.259
弱み自己理解	.17	.01	1	.115	.122	.017	-.147
強み自己理解	.598**	.395**	.115	1	.267	.234	.308*
対人積極性	.294*	.299*	.122	.267	1	-.028	-.132
依頼方法	.178	.01	.017	.234	-.028	1	-.105
自己肯定感	.261	.259	-.147	.308*	-.132	-.105	1

**相関係数は1%水準で有意(両側)

*相関係数は5%水準で有意(両側)

**相関係数は1%水準で有意(両側)

*相関係数は5%水準で有意(両側)

次に、t検定を行い、自閉症児群と健常児群の各下位尺度の平均値を比較した(図1)。2つの群の各下位尺度の平均値と標準偏差、t値、dfの値を示したものが(表4)である。他者信頼感、弱み自己理解、強み自己理解、自己肯定感の尺度については、2群間の分散に等分散性が仮定さ

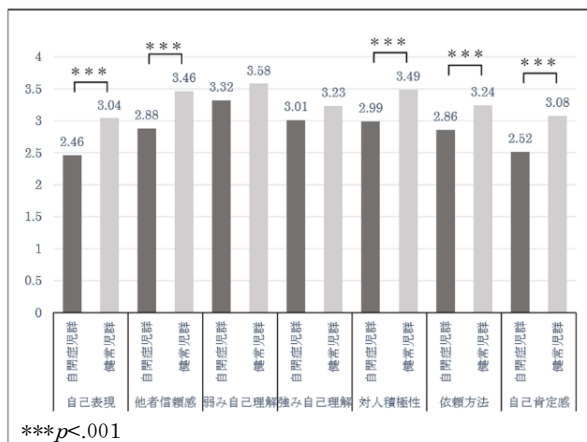


図1 自閉症児群と健常児群の各下位尺度における平均値の比較

さらに、自閉症児群の調査結果に基づいて、クラスター分析を行い、生徒をA、B、Cの3つのグループに分類(図2)し、各下位尺度における平均値を比較した。グラフに示した、自閉症児群の3グループ間における各下位尺度の平均値と標準偏差、F値は、表5のとおりである。また、分散分析を行い、有意差が見られた5つの下位尺度について多重比較を行い、グループ間に有意差があるか確認した。

Aグループは、自己表現、強みの自己理解が他の2グループと比較して有意に低い。さらに、他者信頼感と自己肯定感においては、Bグループより有意に低く、対人積極性がCグループより有意に低い結果となっている。

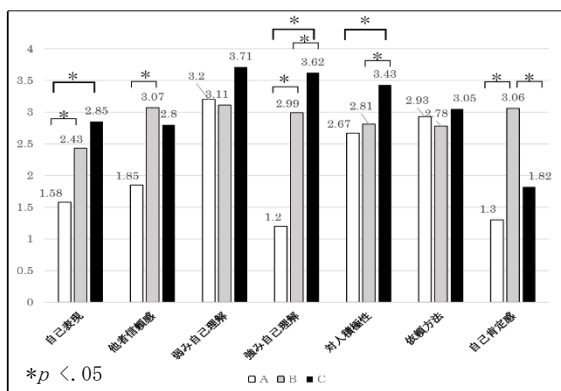


図2 自閉症児群3グループ間における各下位尺度の平均値の比較

表5 自閉症児群3グループ間における各下位尺度の平均値・標準偏差・F値

群		自己表現	他者信頼感	弱み自己理解	強み自己理解	対人積極性	依頼方法	自己肯定感
Aグループ	平均値	1.58	1.85	3.20	1.20	2.67	2.93	1.30
	標準偏差	0.18	0.88	0.91	0.45	0.62	0.80	0.45
Bグループ	平均値	2.43	3.07	3.11	2.99	2.80	2.78	3.06
	標準偏差	0.57	0.73	0.95	0.74	0.42	0.69	0.86
Cグループ	平均値	2.85	2.80	3.71	3.62	3.43	3.05	1.82
	標準偏差	0.46	1.08	0.58	0.55	0.55	0.63	0.58
F値		11.414	4.262	2.344	24.558	9.004	0.747	19.466

れずにウェルチの方法を用いた。自閉症児群は「自己表現」、「他者信頼感」、「対人積極性」、「依頼方法」、「自己肯定感」の5つの下位尺度において、健常児群より有意に低かったため、こうしたことも援助要請行動に影響を与えている要因になっているのではないかと考える。

表4 自閉症児群と健常児群 度数 平均値 標準偏差 t値 df値

下位尺度	群	度数	平均値	標準偏差	t	df
自己表現	自閉症児群	46	2.46	0.62	-6.146	218
	健常児群	174	3.04	0.56		
他者信頼感	自閉症児群	47	2.88	0.93	-4.064	55.032
	健常児群	177	3.46	0.56		
弱み自己理解	自閉症児群	47	3.32	0.87	-1.95	57.033
	健常児群	177	3.58	0.58		
強み自己理解	自閉症児群	47	3.01	0.95	-1.483	59.147
	健常児群	177	3.23	0.68		
対人積極性	自閉症児群	47	2.99	0.56	-5.764	222
	健常児群	177	3.49	0.51		
依頼方法	自閉症児群	47	2.86	0.68	-4.118	223
	健常児群	178	3.24	0.53		
自己肯定感	自閉症児群	47	2.52	1.03	-3.516	56.623
	健常児群	177	3.08	0.66		

Bグループは、自己肯定感が他の2グループに比べて有意に高いグループである。自己表現や他者信頼感、強みの自己理解がAグループに比べて有意に高いが、対人積極性と強みの自己理解がCグループに比べて有意に低い結果となっている。

Cグループは、強みの自己理解と対人積極性が他の2グループと比較して有意に高いグループである。自己表現は、Aグループと比較すると有意に高く、自己肯定感もBグループと比較すると有意に低い結果となっている。

さらに、A、B、Cの3グループにおいて、問題状況に遭遇しているが助けを求めることが困難なケースを想定し、本田(2015)の示す、援助要請経路における5つの段階と関連してくると思われる下位尺度を考えながら、どの段階でとどまる傾向があるかを検討(図3)した。

その結果Aグループは、第3段階の相談の必要

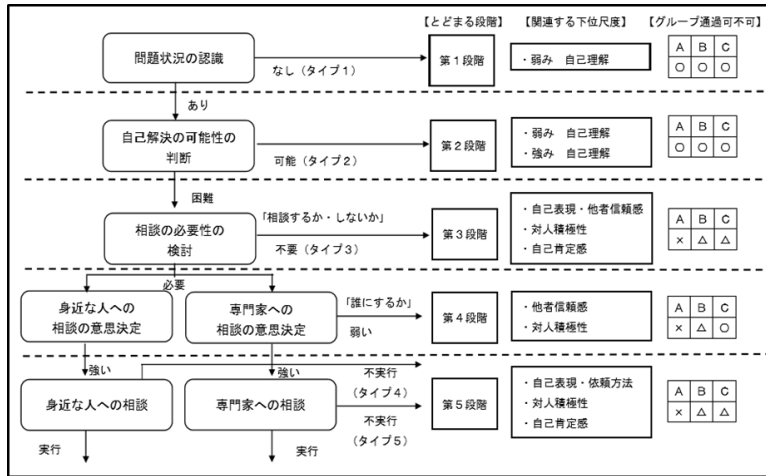


図3 援助要請経路における段階と関連する下位尺度（本田（2015）を基に作成）

の検討において自己表現, 他者信頼感, 対人積極性, 自己肯定感の低さから, 相談を行うことに否定的であったり, 前向きに検討できなかつたりといった心理状態になる可能性が考えられ, タイプ3の心理状態に陥る傾向が強いのではないかと考えられる。

の検討において自己表現, 他者信頼感, 対人積極性, 自己肯定感の低さから, 相談を行うことに否定的であったり, 前向きに検討できなかつたりといった心理状態になる可能性が考えられ, タイプ3の心理状態に陥る傾向が強いのではないかと考えられる。

Bグループは, 第3段階の相談の必要の検討と第4段階の相談の意思決定, 第5段階の相談を実行する段階において, 対人積極性の

低さから, 相談することに不安感が生まれて行動に至らないことが考えられ, タイプ3またはタイプ4の心理状態に傾向が近いのではないかと考えられる。

Cグループは, 対人積極性, 自己表現の高さから, 援助要請の意図は高く, 援助要請行動につながる人が多いのではないかと考えられる。ただし, 自己肯定感の低さが強く出たときに, 第3段階の相談の必要の検討, 第5段階の相談を実行する段階において, 躊躇することが想像されタイプ3またはタイプ4, タイプ5の心理状態に陥ることがあるのではないかと考えられる。

4 援助要請行動の育成を目的とした指導支援の在り方

表6 自立活動 指導計画

(1) 自立活動の授業実践

15時間の指導計画を立てて実践した。活動を切り替えた方が生徒の集中が続くこと, 自立活動の授業の流れを一定にすることで見通しを持ちやすくなることを考慮し, 前半は教師が伝えることを中心とした内容, 後半はゲーム性のある集団活動といった授業展開で行った(表6参照)。全生徒に共通して伝えたい内容自己を見つめること, 他者を受けとめること, 援助要請の必要性和その権利, 援助要請のスキルを扱い, 強みの自己理解, 他者信頼感, 自己表現を高めることを考慮して, 学習内容に関連するグループアプローチを取り入れた。

(2) 対話的アプローチ

帰りの会の前に事例生徒との振り返りの時間を設定し, その他の時間においても対話の重要性を意識し, 思いを共有したり, 一緒に解決の方法を考えたりしながら支援を行った。対話的アプローチの時間は, 援助要請行動におけるそれぞれの生徒の課題を考慮し, 支援者との関係性を深めることや対処方法の助言, 具体的なスキルを練習することに取り組んだ。

題材名	内容, 活動(グループアプローチ)	実施日	時間
1 自分ごと, 友達ごとを知ろう	・好きなこと, 苦手なこと 「自己紹介スゴロク」作成	5月13日	45分
2 自分ごと, 友達ごとを知ろう	・嬉しい言葉, 嫌な言葉 「自己紹介スゴロク」	5月27日	45分
3 自分ごと, 友達ごとを知ろう	・人柄を表す言葉 「よいとこカルタ」	6月3日	45分
4 自分ごと, 友達ごとを知ろう	・友達紹介 「仲間づくり」	6月10日	45分
5 なんとさどうする?	・困るのほどとき 「最近の困ったことトーク」	6月17日	45分
6 なんとさどうする?	・Yくんはどうすればよかったのか? 「伝言絵かきリレー」	6月24日	45分
7 なんとさどうする?	・自分の生活を考える 卒業生の様子紹介 「ブラックボックス」	7月1日	45分
8 なんとさどうする?	・物を借りたいときどうする?(依頼) 「スリーヒントクイズ」	7月15日	45分
9 なんとさどうする?	・活動が分からないときどうする?(質問) 「教えてピンゴ」	9月11日	45分
10 なんとさどうする?	・体調が悪い 体育の授業どうしよう?(相談) 「気持ちをそろえてバズル」	9月17日	45分
11 なんとさどうする?	・ストレス対処法 「シナリオトーク」「対処法ピンゴ」	9月30日	45分
12 自分ごとを伝えよう	・マイサポートブックの内容相談 「人生の目盛り」	10月16日	45分
13 自分ごとを伝えよう	・マイサポートブック作成 「O×クイズ」	10月23日	45分
14 自分ごとを伝えよう	・マイサポートブック作成 「自己紹介クロスワード」	11月13日	45分
15 自分ごとを伝えよう	・マイサポートブック活用	11月27日	45分

(3) 事例生徒の実態・支援方針と変容

事例生徒Aは、自閉症の診断を受けている中学校1年生の男子生徒である。WISC-IIIの結果はFIQ90台である。物静かであり、自分から学級の友だちと関わることはほとんど見られなかった。5月の質問紙調査の結果では、他者信頼感と強みの自己理解が低く、続いて自己表現、自己肯定感の値が低くなっている。クラスター分析結果では、Aグループに分類され、援助要請経路に基づく心理状態は、タイプ3に近い状態と考えられる。教師や教育支援員が活動に寄り添い、積極的に支援を行うことで、分からないときや活動に不安があるときには、その気持ちを近くにいる教師や教育支援員に伝えるようになった。また興味関心に基づいた話題から始めることで、言葉でのやりとりがスムーズになり、自分のことを話すようになった。集団活動は苦手ではあるが、友達や教師と活動や思いを共有し、喜びや楽しさを表現する姿が見られた。12月に行った質問紙調査結果より、下位尺度ごとの平均値の推移(図4)を見ると他者信頼感と強みの自己理解において上昇がやや見られた。

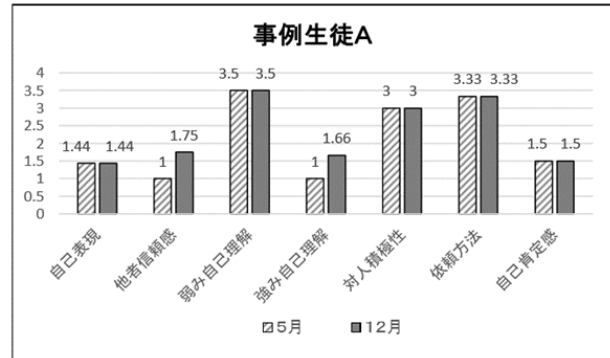


図4 事例生徒A 各下位尺度の平均値の推移

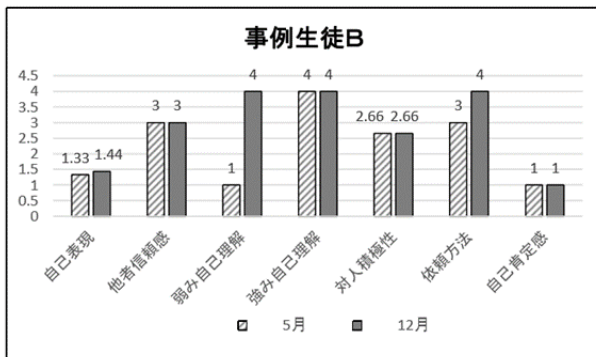


図5 事例生徒B 各下位尺度の平均値の推移

事例生徒Bは、中学校2年生の女子生徒で広汎性発達障害の診断を受けている。WISC-IIIの結果はFIQ70台である。穏やかな性格だが、完璧主義なところがあり、失敗や他者からの批判に弱い。また、聴覚過敏があり、大きな音や大人数での活動は苦手である。5月の質問紙調査の結果では弱みの自己理解が低く、続いて自己表現、自己肯定感が低い値を示している。クラスター分析結果ではBグループに分類される。Bグループは、自己肯定感に有意な高さが見られたが、標準偏差のばらつきがあり、事例生徒Bは低い結果である。援助要請経路に基づく心理状態では、タイプ3、タイプ4に近い状態であると考えられる。情緒が安定しているときには援助要請行動がとれるが、完全主義の考えやこだわりが強くとると混乱し、援助要請行動に結び付かない様子が見られた。自己の特性と陥りやすい状況について、本人が認識できるように振り返りを行い、気持ちの持ち方や問題への対処方法を伝えていく支援を行った。また、ポジティブな思いを記憶として残していくような思考の転換や整理を対話の中で促していくことが有効であったと考える。12月に行った質問紙調査結果より、下位尺度ごとの平均値の推移(図5)を見ると自己表現と依頼方法が少し上がり、弱みの自己理解の平均値は上昇している。

5 総合考察及び今後に向けて

(1) 自閉症児の援助要請行動に関連する要因

自閉症児の援助要請行動には、強みの自己理解と他者信頼感、自己表現が関わっており、それらを相乗的に高めていくことが援助要請行動につながると考えられる。また、自己表現、他者信

頼感、対人積極性、依頼方法、自己肯定感について、自閉症児が健常児に比べて有意に低いことから、こうしたことも援助要請行動に影響を与える要因になっているのではないかと考える。ただし、自閉症児の援助要請行動には障害特性が大きく関連すること、また個に応じて、その場面に依ってその行動を抑制する要因が異なってくることも考慮しておく必要がある。

（２）自閉症児の援助要請行動の育成に向けた指導・支援

本研究における取組みは、自立活動の授業において集団に働き掛けた内容を、対話的アプローチの時間に個に合わせた指導・支援につなげていったことが有効であったと考える。対話的アプローチの時間は、共感的自己肯定感の視点を伝えていく時間にもなっていたと考えられる。援助要請の具体的なスキルを身に付けていても、援助要請態度が否定的であると、援助要請意図が低くなり、援助要請行動には結びつかない。援助要請態度の低い子どもたちへの支援は、他者への信頼感を築くことが基盤となる。支援者が援助要請感受性を高く持ち、丁寧に支援を進めていくことが求められる。他者を受け入れる態度を幼少期から段階を踏んで育てていくことが重要である。援助要請行動を育成するためには、個々の行動を抑制している要因を探りながら、心理状態を理解して介入する必要がある。そうして援助要請行動の結果が良い援助評価になると次の援助要請に結び付き、様々な場面に対応できる適切な援助要請行動の育成につながると考えられる。

自閉症児の援助要請行動の育成に向けた指導・支援は、結果的に自閉症児が自己の障害特性を理解し、特性による困難さとうまく付き合う方法や対処方法を身に付けていくことにもつながるものであった。援助要請行動はソーシャルスキルの一つでもあり、それを指導・支援していくことは、自閉症児が自分らしさを発揮して生きていくためにも重要な視点であると考えられる。

（３）今後の課題

質問紙調査では標本数が少なかったため、信頼性の高い結果を得るためにより多くの自閉症児を対象に研究を行う必要があった。また、因子分析により7つの因子を抽出して下位尺度を構成したが、項目数が少なく、信頼性係数が妥当とは言えないものも見られる。信頼性の高い結果が得られるように質問紙の内容についても再考する必要がある。

適切な援助要請行動を考えた際に、今回は援助要請が必要な場面において、援助要請ができないと想定した支援に偏ってしまった。過剰な援助要請を行ってしまうケースにも注目し、そういったケースの指導・支援方法についても考えていく必要がある。

自立活動の授業で作成した『マイサポートブック』は、今後も教育現場において実践を重ねながら、書式や活用の可能性について検討していきたいと考える。児童生徒が自己の認識を深めていくため、援助要請を行う際の補助ツールとするため、また他者とつながるために活用方法を考えていきたい。

自閉症児の援助要請行動を育成し、合理的配慮を申請する力、さらには自己権利擁護力につなげていくためには、幼少期から他者との関係性の構築や自己を表出する方法の確立、自己の肯定的な認識を段階的に育てていく必要がある。高等学校段階では、実際の社会で必要となる具体的な場面、選挙や受験などにおける配慮申請の方法を学んでいくことも必要となるだろう。今後も教育現場で自閉症児の援助要請行動の育成に向けた実践を積みながら、各発達段階における具体的な支援内容について整理していきたいと考える。